

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊号Vol.1

2015 SANSEIDO

特集 

ゆるぎない英語力を育成するために

平成28年度改訂版 *NEW CROWN* の効果的な使い方①



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊号 Vol. 1

TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号 Vol. 1-2 は、新しい *NEW CROWN* の内容とその指導例をご紹介します (Vol. 2 は 4 月末発行予定です)。
(本誌では平成 24 年度版を *24NC*、平成 28 年度版を *28NC* と略記しています。また、各学年の教科書は、*Book 1*、*Book 2*、*Book 3* と表記しています。)

CONTENTS

巻頭エッセイ

01 *NEW CROWN* の歩み、そして目指すもの 高橋貞雄

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

02 小・中・高のつながりを見据えた改訂 根岸雅史

04 3つのセクションを利用して、文法事項の
確実な定着を目指そう 竹内 理

06 新しい *NEW CROWN* の語彙選定と語彙指導 日基滋之

08 Let's Listen での指導と評価 松沢伸二

10 即興で話す力を育てる指導
—USE Speak (会話) の活用— 鈴木 悟

12 USE Read を活用した「英語で読む力」の育て方 池野 修

14 USE Write を使ったライティング指導の留意点 工藤洋路

16 Project はどのように変わったか 今井裕之

18 入門期を指導する 酒井英樹

20 気づきを重視した音と文字・発音の指導 田邊祐司

22 題材へのこだわり
—引き継ぎたいメッセージ・新たなメッセージ— 田嶋美砂子

Messages from Illustrators

24 本文のイラストレーター 加藤アカツキさんより
表紙のイラストレーター 笠島久嗣さんより



表紙写真について

Lake District

神秘的な湖と草原が広がるイギリスの湖水地方。この地は、長年多くの詩人や作家たちを魅了してきました。絵本作家のビアトリクス・ポターもそのひとりです。

ポターが描く物語は世界中の子どもたちに愛され続けています。なかでもピーターラビットのお話は有名です。ポターは、湖水地方を初めて訪れた 16 歳のときから自然保護への関心が芽生え、生涯を通じてナショナル・トラストを支持し、湖水地方の美しい景観と文化を保全していました。ポターが暮らした家や農場などはそのまま残されており、現在でも多くの観光客が訪れます。

湖水地方は、ナショナル・トラストを支持・理解している多くの人々の協力により、景観を守りながら愛され続けています。 (編集部)



写真：©PPS 通信社

【題材紹介】28NC Book 2

Lesson 2 では、ピーターラビットの物語を扱っています。



NEW CROWNの歩み、 そして目指すもの

高橋 貞雄 Takahashi Sadao (玉川大学)

「不易流行」ということばがあります。NEW CROWN (以下 NC) の歩みを振り返るときに、まさにこのことばが妙を得て当てはまると思います。NC は昭和 53 年度版から改訂を重ねて現在に至っています。数多くの先生方、生徒たちの共感・賛同を得て今日があります。

「不易」の部分でいえば、題材の NC と呼ばれるほどに教科書で取り上げるコンテンツを大事にしてきました。NC には 3 本柱というものがあります。それは、「異文化理解教育」「ことばの教育」「人間教育」です。異文化理解教育とは、一言でいえば、英語教育を通して視野を広げる、世界観を豊かにする、ということです。自分たちと異なる世界を見せる、という点で最たるものはアフリカの扱いです。英語の教科書で最初にアフリカを取り上げたのは NC です。今でこそ非英語圏を扱うことは当たり前のことになりましたが、そのルーツは NC です。また NC はアドホックに世界の地域を扱うことをしていません。アメリカという国、そしてその文化を真に理解するためにはアフリカとの関連付けが必要である、という理念が根底にあります。以来、NC は様々な地域・文化を取り上げていますが、必ず英語との関連、日本との関連を取り入れるようにしています。

英語教育は英語を教えることが第一義ですが、言語教育としての責任もあります。グローバル教育という観点でも言語は重要な要素です。ことばには社会性、関係性、伝達性、表現性、認知性など多様な側面があります。NC はこれまで、ケニアやインドにおける複数言語使用を題材にして、母語の重要性や言語使用の実態を話題にしてきました。日英語比較、少数派言語、スピーチなどもことばの教育の一環です。NC が文法の体系性を重視してきたのもメ

タ言語教育としてのことばの教育を重視していることの反映です。現在、学ぶ力の育成に焦点が当てられています。学習計画の立案や学習の振り返りも結局のところはことばの教育の具現化です。

異文化教育もことばの教育も人間教育の 1 つです。加えて NC が重視しているのが、環境教育、平和教育、共生教育といった、いわば徳育に関わる分野です。広島を基礎にした平和教育、キング牧師を代表にする人物伝などはずっと大切にしてきましたし、伝統文化や自然科学も重視して扱ってきました。

また、ここでの「流行」とは、時代のニーズに応える、ということです。1980 年代にはコミュニケーション・アプローチが導入され、言語活動重視という流れを生みました。つまり、知識の習得だけでなく活用を通してコミュニケーション能力の育成を図るという英語教育観への移行です。時代のニーズに応えるべく、NC は Show & Tell に基づいた表現活動を積極的に導入したり、それまでには見られなかった 4 技能の活動を特化した「Let's シリーズ」を打ち出し、大きな評価を得ました。それを現在では、教科書構成上も、GET と USE へと発展させています。こうした取り組みは言語習得理論の知見と学習指導要領の要請を加味して生まれたものです。

現在は、活動の中で言語に関心を寄せるべきだという Focus on Form の指導法や言語とコンテンツを関連させる CLIL が注目されています。こうした指導法は、NC が従来から取り組んできた指導理念と同一軌道にあるものです。今後の教科書は題材か活動かという二肢選択ではなく、題材も活動も重視していくべきだと思います。そうすることで生徒たちの学習動機が高まり、結局はコミュニケーション能力が高まると思うからです。

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

小・中・高のつながりを見据えた改訂

根岸 雅史 (東京外国語大学)



変革の24NC：インパクト

NEW CROWN は、平成24年度版(以下24NC)において「基礎基本の知識・技能を習得し、それらを活用しながら思考力、判断力、表現力を育成する」という改訂学習指導要領の各教科共通のキーコンセプトを実現するために、レッスン構成を従来のものから大幅に改訂し、レッスンの前半をGET、後半をUSEとして、学びのプロセスが見える形にしました。また、「4技能のバランスのとれた育成」という学習指導要領外国語の改訂の趣旨を踏まえ、USE ReadをBook 1後半以降の全Lessonに配置して読む活動を充実させ、同時にGET PracticeやUSE Writeなどで書く活動も強化しました。

これらの改訂は、従来の授業からの変革を求められるものであったため、当初はとまどいを持って受けとめられた先生方もいらっしゃったかもしれませんが、しかし、徐々に「生徒が力をつけているのを目の当たりにした」といった、新しいレッスン構成についての肯定的な反応をいただくようになりました。これはおそらく、私たち編集委員会が長時間議論してきた改訂の趣旨をご理解いただき、授業展開を工夫していただいたことによるもの、と受けとめております。ご尽力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

熟成の28NC：極める改訂

平成28年度版NEW CROWN(以下28NC)は、上記の状況を踏まえ、レッスン構成は大きく変更しない方針を立てたうえで、実際に教科書を使われている先生方からのご意見をつぶさに検証し、使い勝手を向上させました。さらに、英語教育が大きく変

わろうとする状況を見据え、小中高とつながる英語教育の中核をなす中学校で、確かな英語力が身につく教科書を目指して改訂を行いました。

以降、改訂にあたって力点を置いた4点をご紹介します。それらは24NCの改訂から継承されている「ことばを使う力」「自ら学ぶ力」「他とかかわる力」の3つの力の育成という教育理念と深くかかわっています。すなわち、「ことばを使う力」は次の①②に、「自ら学ぶ力」は③に、「他とかかわる力」は④に対応しています。それらを踏まえて、お読みいただければ幸いです。

①スモールステップの言語活動

28NCの言語活動においては、スモールステップを心がけ、学習の手順が見えるようにしています。USE Write、USE Speakなどの表現活動では、「モデルの提示→モデルの分析タスク→自作の展開」を基本構造とし、小タスクを重ねながら、ていねいにアウトプットに導いています。そのため、従来1ページであったものを2ページ配当としています。USE Writeでは、自作をする前に、クラスやグループで1つの英文を作成する活動を取り入れました。仲間と協力して英文を作成するプロセスを体験することにより、英文作成の手順や英文構成への理解が深まり、書くことへの苦手意識が強い生徒も取り組みやすくなります。

また、USE Readにおいても、英文を読む際に、「概要把握→詳細理解→整理」の3段階で、それぞれ視点を変えて繰り返し読むタスクを配置し、スモールステップを実現しています。

こうして、それぞれのUSEの活動でつけた力は、学期に1回配置された集大成の言語活動Project

で発揮できるように構成されています。

②ジャンル意識

各技能とも、英文のジャンル意識を高めました。例えば、USE Speakは、「発表」(スピーチなどのモノログ)、「会話」(双方向のダイアログ)と分けました。両者はどちらもスピーキングの活動ですが、それぞれ別の力が要求されるため、構成やタスク内容を変えています。

USE Readは「説明文」「意見文」「物語文」の3つのタイプに分け、それぞれのテキストタイプに応じた読む力が育まれるようなタスクを設定しました。例えば、物語文であれば、あらすじをつかむタスク、意見文であれば、核となるメッセージをつかむタスク、となるように意識しました。

USEのページには、ジャンルがアイコンで提示されていますので、生徒にも意識を喚起できるようになっています。中学校段階では、さまざまなタイプの英文すべてにうまく適応できることまでは求められないかもしれませんが、多くのジャンルに触れ、意識をしておくことは、英語学習の次のステップにつながるものと考えます。

③メタ学習スキル育成の強化

どの教科もそうですが、とくに語学の場合、学習量の確保が求められることは論をまたないでしょう。学習指導要領でも「自ら学ぶ力」と位置づけられ、強調されているように、授業以外の場面でも継続して学ぶ意欲と自学自習できる力を生徒に身につけさせたいものです。近年はアクティブ・ラーニングや協働学習など、教師主導の授業観から生徒主体へ、という新しい潮流も出てきています。

28NCでは、自学自習できる力の育成につながる内容を強化しました。24NCから掲載されている「この課で学ぶこと」「文法のまとめ」などに加えて、各言語活動に「Tips」を用意し、各技能を高める「コツ」を明示しています。さらに「For Self-study」では自学自習のヒントや方法を提示しています。

自分の英語力をセルフチェックできるよう、Wordsや「基本文のまとめ」(付録)にチェックボックスを、さらにCAN-DOリストのページ「What

Can I Do?」を設けました。特にCAN-DOリストについては、各学年の終了時に何ができるようになっているのか、と生徒自身が自分の力を見つめることが、高校の英語学習につながっていくものと考えます。

これらは、生徒自らが読んでわかるような記述になっていますので、実際の授業においては注意を促す程度でも効果はあると考えられます。随所にちりばめられた情報に、生徒自身が意識的にアクセスすることで、「英語の力」はもちろんのこと、「英語を学ぶ力」をも身につけることを期待します。

④生徒が共感できる題材

今回の改訂にあたって、従来より好評をいただいているキング牧師のような題材については残しつつ、生徒が共感できる新教材を発掘することに意を用いました。世界中の子どもたちに親しまれているPeter Rabbitの話(2年Lesson 2)や中学時代にテニス修行のために単身渡米した錦織圭選手の物語(3年Let's Read 3)などは、その方針の下、新しくラインアップされた題材です。

また、GETからUSEにつながるストーリー性を強化し、GET PracticeやUSEの言語活動にも久美やボールなどのメインキャラクターを登場させることで、キャラクターの世界につながりをもたせて提示するようにしました。生徒は意識を寸断されることなく、興味を持続させながら学習に取り組めることと思います。

おわりに

以上、今回の改訂の4つのポイントを挙げさせていただきます。

28NCを縦横無尽に使うなかで、高校・大学へとつながっていく確かな英語力を生徒たちが身につけ、卒業してからも英語学習を続けられる基礎的な学習スキルを獲得できることを期待しています。また、NEW CROWNの題材を通して、日本の中学生がさまざまな視点から物事を考えることができ、豊かな感受性を持った人間に育つことを願っています。

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

3つのセクションを利用して、 文法事項の確実な定着を目指そう！

竹内 理 (関西大学)



文法事項の確実な定着は、4技能を統合したコミュニケーション活動を円滑に進める上で、きわめて重要となります。また、小学校で体験的に学んだものを整理し、発展させていくためにも必要不可欠といえるでしょう。この文法事項の整理・定着を主として取り扱うのは、「文法のまとめ」、「Review」、そして「絵でわかる英語のしくみ」の3つのセクションとなります。

文法のまとめ

28NCでは、各Lessonの末尾に配置されている「文法のまとめ」を1ページに凝縮し、より見やすくする工夫を取り入れました。このため、例文の日本語訳は、付録に新設した「基本文のまとめ」(ドリル形式の反復練習などに利用)に移動しました。また、24NCではこのセクションに、確認問題として文法や和文英訳の問題を数問含んでいましたが、28NCではこれらは含まれていません。その代わりに、ペンギンのキャラクターを利用して、生徒が間違いやすいポイントを簡潔にまとめたり(右図①)、関連文法事項との対比を図でわかりやすく提示したり(右図②)しています。

このような変更を行ったのは、本セクションでは「文法事項を明示的に、しっかりと整理・定着させる」ことに焦点を当てたいと考えたからです。文法事項の教え方には、(例文等からルールを引き出させる)暗示的なものと、(ルールを整理して示していく)明示的なものがあります。このセクションは、主として後者の明示的なアプローチで理解を促進していくことを念頭に作られています。つまりGETやUSEのセクションを利用して学んできた事項を、ここでまとめて整理し、確認していくという使い

になります。

さて、「文法のまとめ」を使った実際の授業で留意したいのは、「あそこに文法事項がまとめてあるから試験前に読んでおいてね」といった使い方にならないことです。GETやUSEで使った文を参考にして考えさせながら、グループワーク等を利用し、生徒達に自らの力でルールを整理させていく。その後、このページを参照しながら、しっかりと確認させていくような使い方になるのが理想的といえるでしょう。

その際、教員の側は、整理を誘導するような発問をしていく必要があります。たとえばBook 1 Lesson 9であれば、「過去形と一緒に出てくる言葉には、どんな特徴があるのかな」のように発問し、時には例をあげつつ導いて、産物として、明示的なまとめが出来上がるようにしていくとよいでしょう。そして締めくくりは、整理された知識を活用していくこと。活用を目指した言語活動を、最後にぜひ入れていただければと思います。

Book 1 Lesson 9 文法のまとめ

9-1 □ Amy played basketball last Sunday.	□ エイミーは先週日曜日にバスケットボールをしました。
9-2 □ Did Amy play basketball last Sunday?	□ エイミーは先週日曜日にバスケットボールをしましたか。
□ — Yes, she did. / No, she did not (didn't).	□ はい、しました。 / いいえ、していません。
□ Amy did not (didn't) play basketball last Sunday.	□ エイミーは先週日曜日にバスケットボールをしませんでした。
□ Amy went to Hiroshima last year.	□ エイミーは昨年、広島へ行きました。

Book 1 付録 基本文のまとめ (Lesson 9)

Review

文法事項に関わる2つ目のセクションは、「Review」です。我々教員の悩みの1つは、教えたことがなかなか定着しないことにあります。しかし、記憶のメカニズムから考えると、これは至極当然のこととなります。定着を促進するには、繰り返し対象に触れさせ、そして実際にその対象を利用してみるのが大切ですが、従来、このような繰り返し対象が、教科書には欠けてしまうきらいがありました。28NCで設けられた「Review」のセクション(学年ごとに2箇所)では、この点を反省し、いくつかのLessonに散らばって存在している重要文法事項を1つにまとめ、関連づけながら整理していきます。例えば、右に示されているBook 3のReviewであれば、これまでに学んできた時制が、例文と図を使ってコンパクトにまとめられています。

このセクションを利用した指導上の留意点としては、いきなりこのページを見せるのではなく、生徒にこれまでの学習を振り返らせ、自らにReviewを作らせる、ということがあげられます。その際、「文法のまとめ」のセクションと同様に、ペアワークやグループワークなどの協働作業が重要となってきます。また、教員の発問による誘導も必須でしょう。加えて、単なるまとめの作業に終始しないよう、まとめたあとは、これらの文法事項を使ったコミュニケーション活動を取り入れていくことも大切です。

絵でわかる英語のしくみ

3番目のセクションが、付録にある「絵でわかる英語のしくみ」です。この部分は、単なる文法のまとめではなく、英語という言葉の特徴を、日本語と対比させながらまとめているセクションです。たとえば、Book 2のp.130にある「情報の流れ」の解説などは、「英語らしさ」がどのようにして生まれるのかという問題を取り扱っており、言語の学習を通

して文化の機微にも触れることが可能となっています。このような対比をサンプルとしてみせ、より自然な英文を考えさせるような活動を適宜加えることで、学習者の動機づけにも役立つものと思われます。

上記3つのセクションすべてに共通しているのは、断片的な文法事項の理解を、(学習者が主体となって)体系的な知識に整理・変換し、それを使うことで定着させていこうとする流れです。この流れの中で、28NCの3つの文法セクションが大いに活用され、生徒たちの文法力がより確固なものになれば、著者一同、嬉しい限りです。

Book 3 Review 時制

Book 2 付録 絵でわかる英語のしくみ

NEGI SHI MASASHI
TAKEUCHI OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHUNJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
IMAYUKI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MITSUKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

新しいNEW CROWNの 語彙選定と語彙指導

日 葦 滋 之 (玉川大学)



『中学校学習指導要領解説外国語編』の言語材料の「語、連語及び慣用表現」では、指導する語の総数を「1200 語程度の語」としています。限られた教科書のページ数に、どのような語彙を盛り込み、学習者に語彙の定着を図る工夫をしたらよいかは大きな課題だと思います。まず、28NC の語彙選定がどのように行われたのかを振り返ってみたいと思います。

28NC の語彙選定について

教師が学習者に学んでほしいと思う語彙として、①社会で必要とされている基本的な語彙、②実用英語の観点から英語検定試験で求められる語彙、③平成 10 年の学習指導要領の「別表 1」などの語彙、④平成 24 年度版検定教科書で使用されている語彙、⑤学習者がコミュニケーション活動で必要とする語彙、といった観点からコーパスを作成しました。具体的なワードリストや各コーパスは以下の通りです。

① COB5, LDOCE3	COBUILD5 の 3 diamonds の語彙 (654 語) と、話し言葉における使用頻度上位 1000 語
② 英検 コーパス	2009 - 2011 年度の英検 5 級, 4 級, 3 級のコーパスに出現する語彙
③ H10CS	学習指導要領「別表 1」の語。季節, 月, 曜日, 時間, 天気, 数 (序数含む), 家族 (186 語)
④ 教科書 コーパス	H24 年度版検定教科書 6 社に出現する語彙 (listening script 含む)
⑤ 中学生の学習者 コーパス	スキット, 日本紹介, スピーチ, 将来の夢エッセイ, 冬休みの日記からなる学習者コーパスに出現する語彙

28NC では、これらのワードリストとコーパスから、どの分野にも使用される語彙 (range) で、なおかつ使用頻度 (frequency) の高い語彙を教科書で扱うべき 1200 語程度の語彙として選定しています。教科書本文の執筆の際は、この 1200 語を活用して執筆作業を行っています。

28NC の語彙構成について

28NC は、連語及び慣用表現を除き、新語は「最重要語」、「重要語」、「話題語」の 3 部から構成されており、上記のワードリストや複数のコーパスをもとに精選された 1200 語は、「最重要語」、「重要語」に分類されています。

最重要語は、1200 語のうち、最も活用度の高い 600 語で、教科書の Words 欄に太字で示しています。

重要語は、最重要語の次に大切な語です。最重要語と重要語は、生徒が話したり、書いたりすることができることを目標とする語 (発表語彙) で、Words 欄の語彙の横にチェックボックスを付け、覚える語として明示し、学習者の自律的学習に役立つようにしてあります。

話題語は、教科書の題材との関連で必要な語で、特定の英文の中で理解することを目標とする語です。例えば、人名・地名などの固有名詞がそれにあたります。生徒が読んだり聞いたりして理解できることを目標とする語 (受容語彙) です。最重要語や重要語のように書いて覚える語彙ではないため、Words 欄の点線の下に書体を変えて示し (century), その意味を付してあります。

教科書で語彙指導をどのように行うか

生徒から単語が覚えられない、どうしたら覚えら

れるようになるのかという質問をよく受けます。28NC では語彙の習得がしやすいようにさまざまな工夫をしています。

(1) 語彙をリサイクルし、徐々に増やしていく工夫
Book 1 Lesson 3 の後の Words & Sounds 3 「1 日の生活」では、get up から go to bed までの語句を学習し、自分の 1 日について話す活動を行います。そして、少しあとの Lesson 6 GET Part 1 の Word Bank 「1 日の活動」では、get to school から feed my cat など学校や放課後の行動を表す語句を扱い、語彙の幅を広げています。Word Bank と連携する Practice の Speak では、この Word Bank に加えて既習の Words & Sounds 3 の語彙も活用し、1 日の生活についてペアで話します。このように 28NC には、語彙を繰り返し使用し、さまざまな活動を通して、語彙の定着を図っていく工夫があります。

(2) Word Bank と Practice との連携

Word Bank は、カテゴリー別に分類した語句をイラストで提示し、視覚にうったえることによって記憶しやすくしています。また、前述の通り、Practice の活動を行う際に参考となる語句や表現をまとめることで、Practice と連携しながら語彙の定着を図るように工夫されています。

Nation (2001:63) は、語彙習得について、noticing (単語への気づき), retrieval (単語の呼び起こし), creative (generative) use (単語を用いた創造的 (生成的) 使用) という一連の 3 つのステップを踏むことが重要であると述べています。

まず、Word Bank で語彙に注目し、Practice でその語彙を思い起こしながら Speak や Write の活動に活かします。Practice では主に、自分のこと、あるいは友達のことについて話したり、書いたりするため、Word Bank で練習した語彙を創造的に使用する活動に近いと言えます。

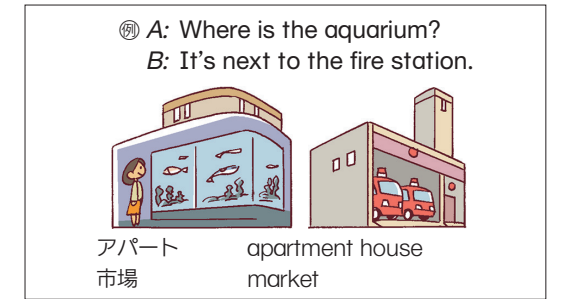
教科書を後ろから見ることの勧め—付録の活用

教科書を前から順にしか見ていないと、巻末に役立つ便利な情報があることに気づかず、あとで後悔するといったこともあります。ぜひ一度、後ろから

眺めてみませんか。

(1) いろいろな単語

教科書の巻末付録には、「いろいろな単語」があります。さまざまな語句が意味のカテゴリーでまとめられており、その語句を用いた対話のモデルも提示されています。例えば Book 1 の「施設」では、下記のように対話文に続き、多くの施設に関する語彙が提示されています。



全学年で豊富な対話例と語彙が提示されているので、ここを使えば、これまで学習者が直面してきたような英語で言いたいけれど単語を知らないから言えないということはありません。チャットなどの帯活動で繰り返し使用することにより、自己表現の幅を広げます。

(2) 単語の意味 調べて覚えよう

巻末の「単語の意味」には、語句の「使い分け」のコラムがあり、学習者は類義語の違いを知ることができます。big, large, great の使い分けをはじめとするコラムが Book 1 に 11 個、Book 2, 3 にはそれぞれ 15 個設けられています。コラムを活用することで語の違いを的確に知ることができます。

28NC は、使い込むことでたくさんの語彙のインプットができ、学習者に無理なく語彙が定着していく工夫が随所にされています。28NC が語彙指導に、また学習者の語彙学習に役立つことを願っています。

【参考文献】
文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』(平成 20 年 9 月) 開隆堂, 2008.
文部科学省『中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説—外国語編—』東京書籍, 1999.
Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners. 2006. (改訂第 5 版) Harper Collins.
Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE) Fourth edition. 2003. Longman.
Nation, I.S.P. 2001. Learning Vocabulary in Another Language. Cambridge University Press, Cambridge.

NEGIISHI MASASHI
TAKAHASHI OSAMU
HIDAI SHIGEYUKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
IMAJI HIROYUKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MITSUKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

Let's Listenでの指導と評価

松沢 伸二 (新潟大学)



USE Listen から Let's Listen へ

28NC では、リスニングの指導は主に Let's Listen で行う。このページは 24NC の USE Listen のページを発展的に引き継いでいる。以下に USE Listen から Let's Listen への改訂の意図と実際、さらに指導と評価の要点を説明したい。

より豊富なインプット

28NC ではリスニングの指導と評価が大きく変わる。28NC で学ぶ生徒には、より頻繁に、より多くの音声インプットが与えられることになった。頻度については、3 学年で計 8 回の USE Listen から、3 学年で計 18 回の Let's Listen へと、2.3 倍に増えている。一方で量的には 3 学年で 1.7 倍に抑えられ、生徒が 1 時間で聞く長さがより適切になっている。

これは、学習者はインプットとアウトプットの機会が多いほど英語力を向上する (Ellis & Shintani, 2014, pp.24-25 など)、という第二言語習得 (SLA) 研究で明らかになったことに配慮した改訂である。

3 種類の聞き取り

リスニングは、対話のように聞いたあとに発話する場合と、ラジオニュースのように聞き取りに専念する場合に分かれる。28NC を使う英語授業では、前者を話す領域で、後者を聞く領域で指導する。

右ページに 28NC の Let's Listen のページの冒頭を例示した。教師は生徒の聞く技能を、次の①～③の 3 種類の聞き方を指導して育成する。Book 1 Let's Listen 2 「先生へのインタビュー」では、ALT の先生の出身国や誕生日など、「①聞き手が必

要な情報を聞き取る」。Book 2 Let's Listen 5 「留守番電話のメッセージ」では、誰からのどんな条件かなど、「②話し手が伝えたいことを聞き取る」。そして Book 3 Let's Listen 3 「テレビニュース」では、いつ・誰が・どこで・何をしたなど、「③話の全体的な内容を聞き取る」。

生徒は以上の①～③で「聞くことを学ぶ (learn to listen)」。一方、全ての Let's Listen の最後の課題は、「◆どんな表現が使われていたか、もう一度聞いて確認しよう。」である。ここでは「学ぶために聞く (listen to learn)」。講義を聞くときのように、「できるだけ多くの詳細を聞き取り、知識に加えて語彙・文法・音声等の習得も行う聞き取り」の学習機会を与えることでリスニング力をつけたい。

実践的な聞き取り

リスニングの場面は、教室内の本物のコミュニケーションと教室外の実際のコミュニケーションの 2 つの言語使用領域に見いだされる。「先生へのインタビュー」は前者の、「留守番電話のメッセージ」と「テレビニュース」は後者の領域の身近な場面での実践的な聞き取りの学習である。

24NC は USE Listen を Lesson の中に配置し、Lesson の話題や新出文法に配慮して聞き取りのタスクを設定している。一方、28NC では Let's Listen を Lesson の外に置き、Let's Talk 同様に独自のシラバスに基づいて、2 つの言語使用領域での実践的リスニング能力の伸長を期す。

指導の仕方

上述のように、各 Let's Listen のページのねらいは①、②、③のどれかになる。①から③へと難しく

なるため、シラバス上では 1 年生に①を多くし、学年が上がるにつれて②と③が増えるように配置している。

各 Let's Listen のページには Pre-listening, Listening, 表現の確認 (◆) の 3 種の課題を用意している。Pre-listening では、まず絵を用いて場면을把握し、「内容・形式スキーマを活性化して、聞く前に予測すること」の重要性を指導する。

続く Listening では、①～③のどれか 1 つの聞き取りに取り組む。ここでは聞き取りの種類に応じて、2～3 題の課題が設定されている。生徒が目的を変えて数回聞き、ねらいの聞き取りに成功するように指導する。

最後の表現の確認 (◆) ではスクリプトを示し、Expressions のコーナーの語句をチャンクとして活用して、詳細まで聞く聞き取りに取り組ませる。

(なお、初学者に大切な音の変化などの聞き取り指導については、Sounds についての別稿を参照のこと。)

評価の仕方

文部科学省 (2013) で、「時間軸に沿って物語のあらすじを読み取ることができる」が指導目標のとき、①教科書の物語文でその読み方を指導 → ②教科書とは別の同じような時間軸で構成された物語文を用いて、あらすじをつかむ練習 → ③教科書とは異なる物語を読む筆記テストにおいて、時の流れを示す表現などを頼りにしながら全体のあらすじを読み取る評価、という手順が改めて示された。

以来、学校では、教科書の課題を「学習タスク」、定期考査の課題を「評価タスク」、評価に向けて練習する課題を「練習タスク」呼び、練習タスクと評価タスクでは、学習タスクと「同じような」ものが異なる (パラレルな) タスクを用いる新しい指導と評価が実践されている (大岩 (2013) など)。

リスニングでは、学習タスクとパラレルな練習タスクと評価タスクを、以下に留意して作成する。

Book 1 Let's Listen 2

●聞き手が必要な情報を聞き取る
●話し手が伝えたいことを聞き取る
●話の全体的な内容を聞き取る

先生へのインタビュー

Pre-listening
ALTの先生にインタビューをします。自分ならどんなことをたずねたいか、考えてみよう。

Listening
1. インタビューの会話を聞いて、ALTの先生の名前・出身国・誕生日・家族の人数を、下のメモに書き入れよう。
2. もう一度聞いて、先生の好きな日本食とスポーツを選び、語句や絵を○で囲もう。

名 前: デイビス先生 (Mr Davis)
出身国: _____
誕生日: _____月 _____日
家 族: 兄・弟 _____人、姉・妹 _____人

好きな日本食: 天ぷら・納豆・煮物・すし
好きなスポーツ: _____

◆インタビューでどんな表現が使われていたか、もう一度聞いて確認しよう。

Expressions
Do you have any brothers or sisters? 兄弟や姉妹はいますか?
Thank you for your time. お時間をとっていただきありがとうございます。

Sounds 英語らしい音
次の英文を聞いて、文の終わりを上げて発音している場合には「ノ」を、下げて発音している場合には「ハ」をそれぞれ()に書き入れよう。

1. Sorry? ()
2. When is your birthday? ()
3. I have two brothers. ()
4. Do you have any brothers or sisters? ()

68 sixty-eight

- ・聞き取りの場面と話題：学習タスクと同様にする
- ・聞き取りの種類：学習タスクと同一にする
- ・聞き取りの課題：学習タスクと同様にする
- ・音声の長さ：学習タスクと同様か短めにする
- ・音声の速さと質：学習タスクと同様にする
- ・音声の語彙と文法：学習タスクと同様にする
- ・音声の(ニュースなどの)テキストと(描写などの)ジャンルのタイプ：学習タスクと同一にする
- ・音声：ALTに依頼するか、ソフトウェアで作る
慣れてくると、パラレルなリスニングのタスクの作成は、意外に簡単で、楽しい。練習タスクで知識・技能を確実に身につけさせ、生徒が自信を持って定期考査の評価タスクに臨めるように指導したい。

[引用文献]
Ellis, R. & Shintani, N. (2014) *Exploring language pedagogy through language acquisition research*. London: Routledge.
文部科学省 (2013) 「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」
大岩樹生 (2013) 「[5 つの提言]を受けて、今やるべきこと (1) 一初見の文章による内容理解の評価 (Reading)」 *Teaching English Now*, Vol. 25, pp.16-18.

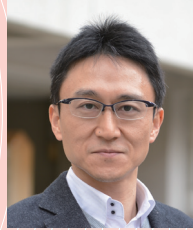
NEGIISHI MASASHI
TAKAHASHI OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHUNJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
IMAJI HIROHIKI
SAKAI HIDEKI
TAHARA YUJI
TAJIMA MITSUKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

即興で話す力を育てる指導

—USE Speak 会話の活用—

鈴木 悟 (東京都立両国高等学校附属中学校)



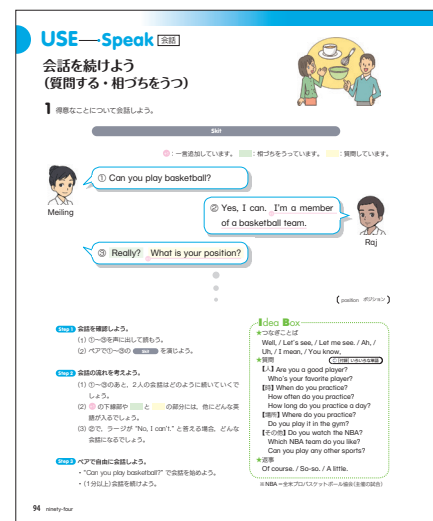
はじめに

英語の授業では、生徒同士で会話させてみると、会話が成立しなかったり、会話がすぐに止まり沈黙してしまったり、言いたいことが言えなくて日本語が聞こえてきたりすることもある。

実際に会話を終えた生徒に感想を聞くと、「時間があれば思い出せた」「言いたいことを(直接)表す単語や文法がわからなかった…」など、その多くが教科書などで学習した既習の定型表現を、言いたくても瞬時に発話できていないことがわかる。その原因は、主に次のようなことが考えられる。

- ・日本語で考えてそのまま英語に直訳してしまう
- ・自分の語彙レベルで言い換えることができない

Book 1 Lesson 7 USE Speak 会話



【指導のポイント】：リアクション／相づち／アイコンタクト／つなぎことば／確認(サマライズ・エコ)／一言で終わらない質疑応答力(事実+感想, 事実+具体例, 事実+感想+質問など)／など

定型表現の自動化を目指したアウトプット活動

日本語を英語に直訳しないためには、瞬時に口から出てくる定型表現などを増やし、会話を継続する力や即興で話す力を育てることが鍵となる。

28NCでは、各学年にUSE Speak 会話(チャット活動)が設定されている。しかし、左下のBook 1 Lesson 7の例のように、チャット指導のポイントは多岐にわたるため、全てを1~2時間で教えるのは、生徒への負担も大きく難しい。

そこで、教科書がGETからUSE、そしてProjectに向かって構成されている点を上手く活かし、USE Speak 会話(会話)を目標として、次のように段階的に指導し、暗唱・発表レベルまで高めていくことで、学習の定着を図ることができる。

《USE Speak 会話(会話)を目標とした段階的な指導例》

- ① Lessonの各パートの導入時に、挿絵や写真のピクチャーカードを活用して、生徒が写真描写 (picture description) を行う。
- ② GETやLet's Talkのdialogを使って、リアクションや相づちなどを入れながら、skitやplus one dialogの活動を行う(ペアで会話や音読練習をし、クラスの前で発表を行う)。
- ③ Lessonのまとめとして、GETやUSE Readの本文の内容に、自分の意見や調べたことなどを加えて発表するoral presentationの活動を行う。
- ④ Projectでスピーチやプレゼン、インタビューなどを行う際は、リハーサルなどを行い、全員が自信をもって話せるまで高める。
- ⑤ USE Speak 会話(会話)では、ペアで練習したあと、ALTとの会話を行い、定型表現を定着させる。

自分が持っている単語を工夫して使う力

会話のあとには、「英語で言いたかったけど言えなかったこと」を生徒に書き出させるとよい。そうすれば、既習の定型表現を使って、「言いたいことが表現できる」ことや、「言い方は何通りもある」ことに気づかせることができる。特に学習の初期段階では、この発想とやり方をクラス全体へフィードバックし、共有することが大切だ。

また、学年が上がれば、話す内容も込み入ったものになるため、今ある自分の語彙を使って表現する力を身につけることが、会話を継続する力や即興で話す力を育てるための、もう1つの重要な鍵だ。例えば、生徒が次のような会話をしていくとする。

A: I like sports very much.

B: Why do you like sports?

A: …(日本語で)気分が爽快だから。

Aの生徒が英語で言えなかったことは、「スポーツをすると気分が爽快になる」だ。接続詞などを学習していない1年生には易しくはないが、ここでは「I play sports, and I'm happy.」など、既習の簡単な表現で言うことができる。つまり、的確な定型表現や語句が出てこないときは、似た意味の表現や語句で代替したり、状況を細かく映像化して順序立てて説明したり、具体例をあげて説明したりしながら、やりくりできるようになることが肝心だ。

さらに「瞬時に言えない」「言いかえもできない」という場合は、伝えたい内容の2割程度、つまり本質的なことだけを相手に伝え、残りは「言わない」という考え方もあることにも気づかせたい。

そのような気づきを体験していくことで、日本語で考えたことを英語に変換するよりも、英語で考えたことをそのまま言ったり、状況を映像化しながら言える部分だけを英語で言ったりするほうが簡単だと気づく生徒も出てくる。また、それによって、前述①の活動を行うときの、生徒の取り組む姿勢も変わってくる。

考えがなと言えないことに気づかせる

Why (do you like ~)? / What do you think of ~? と聞かれた場合、日本語でも応答に困ることが

あるように、自分の意見や考えなど、何か伝える内容がないと英語でも言うことはできない。つまり考える訓練が必要である。幸い、伝統的にNCでは生徒に深く考えさせる題材が多いため、前述の③ Lessonのまとめのoral presentationや④ Projectなどの活動を行うときも、詳細情報(理由・具体例・感想など)を追加して自分の意見を述べさせることができる。これは、会話の継続につながるだけでなく、ディスカッションやディベートの基盤にもなる。

会話では質より量を重視する

会話の練習では、正確さを意識するよりも、生徒の発話量を増やすことが重要だ。発話量が増えれば、相手に伝わる情報量が多くなり、聞き手の理解が深まったり、会話の有益性が上がったりするからだ。

発話量を重視するという事は、英語の正確さについて指導しないということではない。例えば、話した英文をノートに書かせ、あとでそれをチェックすることで正確さの指導をすることもできる。

ALTとの会話で自信をつけさせる

本校では、授業中、別室にいるALTのところへ生徒が行き、1分間話す活動を継続させている。「ALTに自分の英語が伝わった」という達成感・成就感は、コミュニケーションへの関心・意欲・態度を高め、生徒の自信につなげることができる。

一方で、生徒の声が小さくてALTが聞き取れず、聞き返すことがある。それが原因で自信をなくしてしまう生徒も少なくない。英語が上手でも、伝える内容があっても、相手に聞こえないとメッセージは伝わらない。大きな声で話すことは、英語活動全体の大切なポイントであり、1年の入門期(発話、スピーチ等)から繰り返し指導していく必要がある。

おわりに

授業は、教師と生徒、生徒同士の信頼関係がないと成り立たない。特にUSE Speak 会話(会話)は、生徒同士の会話を中心であり、相手から多くのことを学び、互いに協力するからこそ成り立つ活動だ。それ故、会話の最後は、お互い「Thank you.」や励ましのことばを言って終わらせたい。

NEGI SHI MASASHI
TAJIMA OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
HIMAI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MISAKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

USE Readを活用した「英語で読む力」の育て方

池野 修 (愛媛大学)



新しい USE Read を作るにあたって

28NC では、現行版を発展させる形で、リーディングに特化したページ USE Read を作っている。このページのねらいは、GET のセクションで習得した基礎・基本の力を活用し、まとまった分量の文章の読解に取り組み、英語で読む力を育てることである。

以下、USE Read 指導にあたってのポイントのいくつかを整理しておこう。

1. 予習よりも授業中の活動と復習を重視する

基本的に、USE Read は予習を前提とした授業を想定していない。GET で学んだ内容をしっかりおさえた上で、授業の中で英語での読みのトレーニングをしっかり行う。予習に使える時間やエネルギーがあるのであれば、それは、むしろ復習 (e.g. 授業中に意味を確認した英文を何度も読む) の方に回す方が適切と考えている。

予習を前提としない、読みに特化した授業を行うために、28NC では、新出単語にはあらかじめ日本語訳をつけて教科書中に提示している。このことにより、生徒が単語の意味を調べる作業は必要なくなり、英文を読んでいる時にも単語の意味を参照することが容易となる。辞書指導などはもちろん必要ではあるが、別の機会を設けて行い、USE Read では読むことに集中するというのが方針である。

2. 多様な形で読みのトレーニングを行う

教科書中に含まれている活動の特徴をよく理解した上で、効果的な指導を行うようにしたい。英文の内容理解のためのメイン活動は In-Reading の部

分であり、3つのステップから成っている。それは、1st Reading = 内容のおおすじをつかむ (キーワード、概要、大まかな文章構成の把握)、2nd Reading = 細かい内容をおさえる (詳細の理解)、3rd Reading = 内容をふり返る (要約、表による整理 etc.) というステップである。なお、3rd Reading にそれぞれの英文の読みのゴールになる課題が配置されている。

Book 1 の Lesson 9 (1年間の日本での思い出についてのエマによるブログ) を例にとってみると、1st は4つのブログ記事とそのキーワードをマッチさせる課題、2nd は記事の中心的な内容を確認する問題、3rd は読み取った内容について自分なりに英語でまとめる (本文の表現を使いながら retell/rewrite する) 活動となっている。これらの活動をこなしながら、ターゲットとなる英文を何度も読み返し、徐々に理解を深め、読みのスキルを向上させる。

内容理解のための In-Reading の活動の他に、英文の横の部分には Check という活動がある。Check には3つのタイプがあり、A = 代名詞や言い換え語句の照応のチェック、B = GET で導入・練習した文法の振り返り (Grammar Hunt)、C = 文章構成への気づきの促進という内容になっている。特に C は 28NC で新たに加えたものであり、例えば、「文の最初にある『時を表す表現』に下線を引こう」(Book 2 L2: Peter Rabbit)、「この英文を『調査の概要』『調査結果』『結論』の3つの部分に分けよう」(L7: Presentation) などである。

USE Read は様々なパーツから構成されているが、それぞれの部分の役割を理解した上で、効果的な活用を工夫してみたい。

3. テキストタイプに応じた読みの指導を行う

どのような発問を提示するか、どのような活動を行うかは、読みの目的やテキストタイプを考え合わせて決める必要がある。28NC では、英文を「説明文」「意見文」「物語文」の3つに分類し、それぞれのタイプに応じた読みの力を鍛える。具体的には、説明文では「述べられている主要な事実をおさえること」、意見文では「筆者の言いたいポイント (主張) とその根拠をきちんと理解すること」、物語文では「話の流れや登場人物の気持ちを理解すること」が重要であるため、それに対応した活動を準備している。紙面構成や活動の配置などについては「指導の標準化」を図り、授業に安定感を持たせているが、同時に、テキストタイプに応じて読みを調整することも重要であるため、発問内容や読みの最終タスクの3rd Reading の課題にはバリエーションを加えている。

3rd Reading 内容を整理する
表の空欄に数字や英語を記入し、3つの方法の特徴を整理しよう。

	e-mail	letter	phone
人数	()	()	()
特徴	・easy ・convenient		

Book 2 Lesson 7 説明文の3rd Reading

4. 3年間を見通した段階的な指導を目指す

USE Read の活用にあたっては、それが含まれるレッスンの他ページとの関係を確認するのはもちろんだが、3年間を見通した他のレッスンの USE Read との関係を考えることも重要である。例えば以下のような点を踏まえて段階的な指導を心がけたい。

(A) 「英文の長さ」: 1年の最後では135語、2年生で188語、3年生で329語となっている。最終ゴール (例えば、高校入試に対応できるリーディング能力) から逆算して、それぞれの段階でどの程度の長さの英文を生徒に読ませるのかを意識しながら指導を行うことが必要である。

(B) 「活動のレベル」: 英文のレベルだけでなく、活動のレベルも、徐々に難易度の高い、生徒が自分で考えて行うものへステップアップしていくように

USE Read は作成されている。例えば、2nd Reading の部分を見てみると、1年生の Lesson 7 では、答えに該当する本文部分に下線を引いたり、それを□で囲んだりする活動、Lesson 9 では空欄を埋めて解答文を完成させる活動となっている。自由度を低くした、比較的容易な活動である。2年生の前半になると、日本語による質問に自由解答形式で答える活動、2年生の Lesson 5 以降は英問に答える活動という具合に、徐々に解答形式が変化していく。教科書の進行とともにリーディング活動がレベルアップしていくイメージを持って指導にあたるのが重要であろう。

(C) 「読みのスキル」: 授業の中で鍛える読みのスキルについて、「予測」「キーワード・チェック」「行間を読む」「5W1H」「パラグラフ・リーディング」「情報検索読み」「要約」などの方略を3年間にわたって配している。それぞれの英文に適したスキルを特定し、In-Reading の3rd Reading においてそれに関する課題を提示している。また、スキルの内容について Tips for Reading という形で解説し、生徒もそれを確認できるようになっている。例えば Book 1 Lesson 9 (Four Seasons) 「読む前に、タイトルや写真などから内容を予測してみよう」、Book 2 Lesson 5 (Uluru) 「各段落で一番重要な文を何かを考えながら読んでみよう」などが例にあたる。3rd Reading にある関連活動を行った後に、Tips for Reading の内容を確認するという流れにすると効果的である。

Tips for Reading

時を表す語句は、物語のあらすじを追うのに重要です。それらに注意して、いつ、何が起こったかをおさえながら読んでみよう。

Book 3 Lesson 4 Tips for Reading

28NC は 24NC をベースに、活動の目的や意図をより明確にし、構成や展開をより使いやすしい形に作り直したものである。基本方針は理解していただいた上で、創造的に活用し、「英語で読む力」の育成に役立てていただければ幸いです。

NEGISHI MASASHI
 TAJIMA OSAMU
 HIGASHI SHIGEKI
 MATSUZAWA SHINJI
 SUZUKI SATORU
 IKENO OSAMU
 KUDO YUJI
 HIROTAKE
 SAKAI HIDEKI
 TANABE YUJI
 TAJIMA MISAKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

USE Writeを使ったライティング指導の留意点

工藤 洋路 (玉川大学)



USE Write では生徒に何を意識させるか

USE Write では、1文レベルを超えて、2文、3文、それ以上からなる、まとまった英文を書く力の基礎を鍛えることを目標としている。USE Write の特徴として、「ジャンル」「状況」「読み手」などへの意識が挙げられる。つまり、「誰にどんな状況で、どんな英文を書くか」という、実生活の中で書くという行為を行う際に考慮していることを、USE Write の活動内でも意識することで、実践的な書く力が向上することが期待できる。

特に、読み手を意識することは、書くべき内容を定めるうえで重要な役割を果たす。「海外の姉妹校の友達」(Book 1 Lesson 9) が読み手であれば、日本の文化や慣習には疎いことを踏まえて書く必要があるし、「新聞の読者コーナーへの投稿」のように、読み手が「不特定多数」(Book 3 Lesson 6) であればそれを意識して書く必要がある。この点が、各 Lesson の GET Practice, 3 Write とは大きく異なる。

USE Write の活動の意義

USE Write では複数の文を書くことから、これまで習った文構造や文法事項を活用する絶好の機会となる。言い換えると、自分の頭の中にある文法のデータベースから、自分が書きたい内容を書くのにふさわしい文構造や文法事項を選択するというプロセスの学習ができる。英語学習において頻繁に使われる「定着」や「活用」という言葉が意味するのは、この「必要な材料を選択できる段階」であると考えれば、USE Write の活動の意義が明確になる。

USE Write のもう1つの意義は、複数の文をどう積み重ねて1つのまとまった英文を構築するか

を学べることである。つまり、「文と文のつながり」への意識を高めることができる。この点について『中学校学習指導要領解説 外国語編』では、「『文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと』の部分は、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分ではないという課題に対応して今回の改訂で新たに加えたものである」と記載がある。複数の文を書くことが求められる USE Write を行うことで、この課題が解決されていくことが期待できる。

USE Write で「文と文のつながり」を意識

「文と文のつながり」は大きな意味では文章構成に関わるものだが、USE Write ではそのほとんどが、

Opening (O) ⇒ Body (B) ⇒ Closing (C)

という3段階の文章構成を提示している。例えば、Book 1 Lesson 9 (右上図) では、O = できごと、B = どこで・何をしたか、C = 感想・まとめ、となっている。この3つの段階について、左ページのモデル文では、それぞれが次のように対応している。

O	できごと	⇒	校外学習
B	どこで・何をしたか	⇒	鎌倉に行った 大仏を見た 博物館で歴史を学んだ
C	感想・まとめ	⇒	楽しかった

このようにモデル文の構成をまずは確認することで、内容のつながりを意識させることができる。この内容の流れは、ディスコース・パターンとも呼ばれ、トピックやテーマごとに使うべき適切なパターンが異なる。USE Write では、このディスコース・パターンの学習を指導目標の1つとするとよい。

USE Write で実際に英文を書く

USE Write の右ページは実際に英文を書く活動であるが、すぐには複数の文が書けないので、ステップを踏むことで、そのプロセスを学習する。

- Step 1 テーマについて自分が書く視点を選ぶ
- Step 2 日本語でメモを作る
- Step 3 英語でメモを作る
- Step 4 英語のメモをもとに英文を書く

Step 1 では、テーマについて、どの切り口で書くかという視点を決める。Step 2 では、その視点の範囲内で、自由にアイデアを出す。この段階は、最終的に作文に入れるべき情報かどうかは気にせずに、多くのアイデアを出す段階であるので、日本語で行う想定をしている。そして、まとまりのある英文を書くために特に大切な段階である Step 3 では、Step 2 で出したアイデアから、与えられたディスコース・パターンを意識して、英文に入れると判断した項目を選択して、英語でメモをしていく。

Book 1 の Lesson 9 では、「できごと」⇒「どこで・何をしたか」⇒「感想・まとめ」というパターンが提示されているので、それぞれに当てはまるものを選ぶ。ここで特に注意したいのは、Body に該当する「どこで・何をしたか」が羅列的に書かれていると、まとまりのある文章にはならないことである。そうならないよう、それぞれの事実について、付加

Book 1 Lesson 9 USE Write

できると思われる情報の中から、書く意味のある情報を選ばせる必要がある。例えば、「お弁当を食べた」に続くものとして、「みんなで話しながら食べた」という内容が思いついたとする。「昼食」という点では内容はつながっているが、この内容は、海外の姉妹校の友達が読んで面白いと思うだろうか。代わりに、大仏の大きさを調べてそれを載せることや、屋外にある大仏であるという事実を紹介することの方が、読み手を考慮した場合、有益な情報だと言えるだろう。このように、Step 3 の段階では、活動の最初に確認をした「状況」や「読み手」に立ち返って、どんな内容を書くのが適切かを判断させるとよい。

英文を書く準備をする Step 1～3 を経て、実際に英文を書く Step 4 ではモデル文や Idea Box を利用したり、付録の「基本文のまとめ」を参照したりしながら、どの文構造や文法事項を使うと、メモした内容が正しい英文で書けるかを考えさせるとよい。

USE Write で何を学習するか

USE Write では、これまで習った言語材料の活用だけでなく、「ディスコース・パターン」や「英文を書くためのプロセス」も学習させるとよい。そのためには、活動後の振り返りとして、でき上がった英文だけに目を向けるのではなく、「どんな手順で英文を書いたか」とか「次にまとまった内容の英文を書く時に使えるスキルや手法は何か」という問いを与えることも指導の一環として意義があると言える。

NEGIISHI MASASHI
TAJCHI OSAMU
SHIGEMITSU HIDAI
MATSUZAWA SHUNJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YUJI
HIDAI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TAJCHI YUJI
TAJIMA MITSUKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

Projectはどのように変わったか

今井裕之 (関西大学)



Projectの特徴

24NCのプロジェクト型学習のページの呼称は、Mini-projectであった。28NCは“Mini”ではなくなったが、それには3つの改善の意が込められる。

割かれるページ数は同じで、年間3回の頻度も同じなので、Miniがとれたからといって活動規模が大きくなったわけではない。一番の違いはMini-projectがUSE、つまりLessonの一部であったのに対し、28NCでは、ProjectはLessonから独立している点である。これにより、当該Lessonの文法事項やトピックだけに縛られることがなくなり、各学期で学習した内容や技能(2,3レッスン分)を統合して行うことができる、言語活動のまとめのような位置づけになった。学期末に目標とする「Can-Do」を具体化した課題といえる。

違いの2点目は「考える(Think)」ステップを活動の手順の中に位置づけた点である。24NCのMini-projectは、現実に経験しそうなタスクを設定し、4技能を統合的に運用しながら、ペアやグループでの協働的な活動を取り入れつつ、段階的にタスクを進める構成になっている。その美点を継承しつつ、28NCではブレインストーミングのためのマッピングを加えるなど、話したり書いたりしたい内容を、

可視化して整理するThinkの過程を明確に位置づけた。思考を図示し、可視化することで、英語の知識・理解、技能練習に割く時間と同様に、思考・判断・表現するための時間の確保も大切な学習過程であることを学習者も意識できるよう心がけた。

3点目はUSEで行う言語活動との連携である。Projectを円滑に進めるためには、そのときだけ言語活動を活発化させようとしても難しい。当然ながら、普段からの継続的な取り組みが不可欠である。Projectで行う言語活動は、聞き取り、読み取り、やりとり、書き取り、Show & Tell、インタビュー、プレゼンテーションなど多様である。Projectが始まってからインタビューの方法を説明しては遅い。USE Read / Speak / Writeでこれらのタスク遂行能力を個別に鍛え、Projectでは、思考内容を重視しながら、より統合的に言語活動を実践する。例えば、Show & Tellの構成は、Opening / Body / Closingの3要素からなるが、この構成は、USE Speak / Writeで3年間、学年相応に課題を変えながらも、一貫して繰り返し登場している。思考・判断・表現に応用のきく基本パターンをUSEで育成し、Projectではより統合的な言語活動のなかで、思考のツール、表現技能として応用できることを目指している。

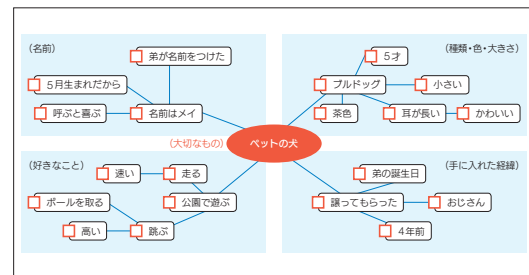


図1 マッピング図(Book 1 Project 3, 1 Listen)

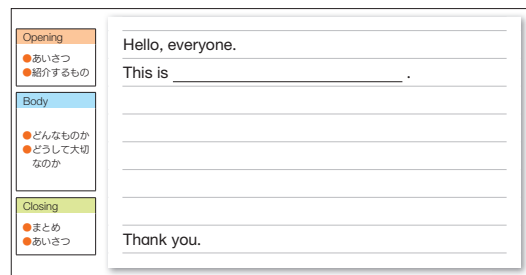


図2 Book 1 Project 3, 4 Write

プロジェクトの進行

活動の進行手順は、どのProjectでも4段階もしくは5段階で仕組まれており、各Projectで順序や内容は異なるが、Listen, Think, Speak, Read, Writeの活動が、現実社会で起こりそうなタスクになぞらえられて、統合的に配列されている(聞きながらメモを取る、など)。Book 1のProject 3「大切なものを紹介しよう」を例に展開を紹介したい。

① Listen

健が作成したブレインストーミングのためのマッピング図(図1参照)を見ながら彼のスピーチを聞く。計画段階のマッピングには、スピーチ内容以外のことも書かれており、その中からどの話題を選択し、関連づけてスピーチを組み立てたかを確認する。

② Think

自分の大切なものについてマッピングを行う。できるだけ短時間で発想を巡らせ、あれも言いたい、これも説明したいと表現欲求を育む時間である。この際、話すことを決めて原稿を書くのではなく「発想を広げること」を目標とする。

③ Speak (interaction)

マッピングを参照しながら、自分の大切なものについてパートナーとインタビューし合う。その際、「Idea Box」にある質問のしかた、会話パターンなどを参照しながら、大切にしているものの描写や説明を工夫し表現の幅を広げる。

④ Write

マッピングやインタビューの際のメモを見直ししながらShow & Tellの原稿を作成する。Opening / Body / Closingをガイドラインとして、全体構成を考えながら書けるように仕向ける。(図2参照)

⑤ Speak (presentation)

原稿のブラッシュアップ、修正、発表練習を経て、Show & Tellを行う。ペア/グループなど、聴衆を少人数に限定する場合も、教室全体の前で発表する場合も、聴衆からの好意的反応が、発表者を育てるために不可欠である。「かろうじて原稿を読み切る」「儀礼的に拍手する」だけに終わらぬよう、発表者には、大切なものの写真を見せるなど表現の工夫を促し、聴衆には、That's cool! など短いコメントや

Uh-huh.などの相づちで、発表者を励まし、支え、讚えることを促す。最初は気恥ずかしいかもしれないが、聞き手が「日本人」のままでは、英語を話す気力も湧かない。何よりもまず聞き手が「英語話者」「好意的な聴衆」を演じることが、居心地よく発表者が表現したくなる空間をつくるために不可欠である。人前で話すことを生業にしている私たちは、聞き手の支えの大切さを日々実感しているはずである。

プロジェクトの「壁」を越えたい

プロジェクト型学習や、タスクベース学習と呼ばれる、現実社会の言語使用を念頭においた言語活動を実践しようとする時、

- ・時間が足りない。特に英語以外のことに割く時間や労力が無駄に感じる。
- ・評価が難しい。文法定着も確認しにくい。
- ・発表や会話がそもそも苦手な生徒たちのケアが難しい。

などの「壁」に直面することになる。今回の改訂で、時間効率が上がる工夫や、より自然で無理のない活動の流れづくり、USE Read / Speak / Writeとの連携強化などを試みたが、それでもなお、時間の壁、評価に値する学力がつくのかという教師の不安の壁、不慣れた外国語でのコミュニケーションへの生徒の不安の壁などは、実践の過程で生じることと思われる。

プロジェクトの「壁」の向こう側

プロジェクト型学習を導入・継続すると見えてくる生徒たちの成長と学力の確かさに驚くことがある。それは表現の豊かさであったり、即興的な対応であったり、心打たれる発表内容だったり、英語を通して他者や社会を知り、自分を表現できた実感からくる自信だったりもする。中でも「使いながら学ぶ」意義を感じるのには、文法も含めた表現の「正確さ」に加えて「適切さ(appropriateness)」である。例えば、主観的な理由を述べる時、I have three reasons! と言うのは不自然ではないが、客観的に理由を分析するなら、There are three reasons! と言ったほうが自然であることに、文脈の中で発話してみると気づくことができる。そんな学びの体験を生徒と共有するのも英語教師の醍醐味かと思う。

NEGISHI MASASHI
TAKAHASHI OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SA TORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
IMAI HIROYUKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MITSUKO

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

入門期を指導する

酒井英樹 (信州大学)



入門期の考え方

入門期 (Get Ready ~ Lesson 3) のポイントは、小中の円滑な接続です。外国語活動が必修化され、5年生と6年生は週1回、英語に触れています。つまり、生徒は英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんできていた経験を持っています。生徒の慣れ親しみを踏まえ、24NCで扱われている語彙や表現を見直しました。小学校で慣れ親しんできた語彙や表現を多く取り入れるようにし、スムーズな接続が可能となるように配慮しました。また、28NCの入門期は「聞くこと」から「書くこと」という指導の流れを大切にしています。本稿では、28NCを使った入門期の指導に焦点を当てます。

小学校英語から中学校英語へ

Get Ready 1「コミュニケーションを楽しもう」には、小学校で体験してきたことを踏まえて、中学校でさらに英語の世界を広げていってほしいという願いが込められています。この考え方は24NCから引き継がれているものです。

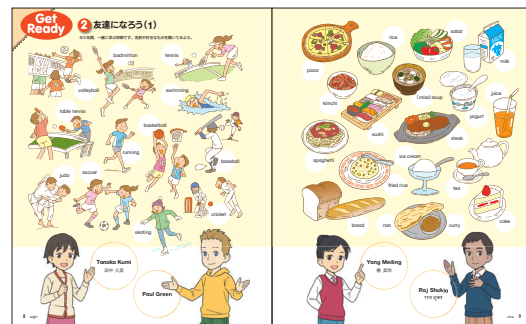
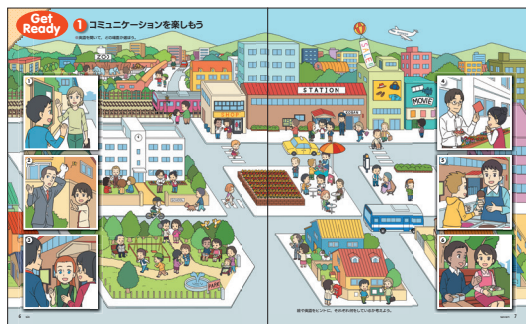
英語のやり取りを聞いて、どの場面のことが選択させるタスクがあります。このやり取りは、小学校

の外国語活動でよく扱われるものですから、生徒の活動状況を見ながら、生徒の慣れ親しみの様子把握することができます。

Get Ready 1の右下に「絵や英語をヒントに、それぞれ何をしているか考えよう」という指示があります。パノラマの絵を生徒に見せて、それぞれの人たちが何をしているのか、どんな話をしているのか、考えさせます。あいさつ、道案内、買物、食事などの場面や、生徒の身近な暮らしに関わる場面などが描かれていることに気づくでしょう。こういった場面でのコミュニケーションを英語で行うことのできる力を中学校3年間で育てていくことになります。Get Ready 1を活用して、生徒が中学校での英語学習を見通せるように指導してほしいと考えます。

生徒の知識や技能の見きわめ

中学校の入門期では、生徒の慣れ親しみの度合いや身につけている知識や技能を見きわめながら、適切な指導を行っていくことも重要です。Get Ready 2「友達になろう」では、登場人物の紹介とあわせて、スポーツ、食べ物、動物など、小学校で扱われているような身近な英語の単語が示されています。教師が発音した単語をタッチさせたり、キー

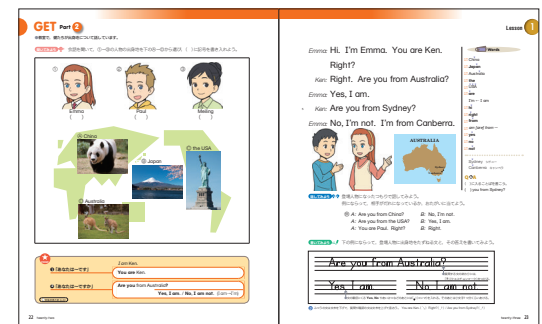


ワードゲームを行ったりしながら、生徒が英語の音声や表現にどの程度慣れているのかを診断することができます。

Get Ready 2は英単語の絵辞典としても活用できます。一般動詞 (Lesson 3) や複数形 (Lesson 4) を学ぶ際には、Get Ready 2にある絵を見ながら好きなものなどについて紹介させたり、数えさせたりできます。また、スペルが示されていますので、Get Ready 2を参考にしながら英文を書かせたりすることもできます。

「聞くこと」から「書くこと」の流れ

1年生のLesson 1~3の構成は、GETだけで成り立っています。各GETは、「聞く」活動で導入され、「書く」活動で終わるという指導の流れになっています。次の例を見てください。



①「聞いてみよう」の活動

聞いた英語の内容を示す写真・絵を選んだり、線で結んだりするタスクがあります。まとまりのある英語を聞いて大まかに英語の意味を理解するという段階です。それほど難しいタスクではありませんが、曖昧な理解から詳細な理解へと学習を進めるために重要なステップとなります。また、「聞いてみよう」の活動を進める際、タスクを行わせ、答え合わせをするだけでなく、英語が使われている状況 (どんな場面なのか、どんな人たちが話しているのか、どんなことを話しているのかなど) に注目させましょう。

② Point

文のしくみを理解する段階です。小学校では Are you ~? と Do you ~? という表現を用いながら活動を行っていますが、2つの表現の区別を理解しているわけではありません。中学校の入門期は、小

学校で慣れ親しんできた英語表現を整理する時期でもあります。生徒は、Do you ~? という表現にも慣れていきますので、簡単に Are you ~? と Do you ~? との違いを指導してもよいでしょう。

文のしくみが整理できたら、もう一度「聞いてみよう」の音声聞かせ、Pointの文に注目させることができます。例えば、Are you ~? という英語が何回使われていたかを聞いたり、Are you ~? で聞かれている内容を確認したりしてもよいでしょう。

また、Pointの文のしくみを理解させるだけでなく、コミュニケーションのために活用できる力を育成することが重要です。整理したPointの文が①で確認した状況で活用できることを意識させます。

③本文

聞いた英語を文字で確認する段階です。音声を聞かせながら音声と文字とを対応させます。音身に慣れ親しんでいる状態であれば、生徒に文字を見せて自分の力で発音させてもよいでしょう。

その後で、Words欄で挙げられている語句の発音や意味を確認します。語句に☑がついているので、チェックするなど学習に活用してください。

④「話してみよう」の活動

Pointの文を使いながらやりとりをする段階です。小学校の外国語活動では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が大切にされ、臆さず他人と関わろうとする姿を育成しています。決まったペアだけでなく、さまざまな人たちと関わることを促すことによって、中学校においてもその積極的な態度をさらに伸ばしていきたいものです。

⑤「書いてみよう」の活動

モデル文を見ながら、英文を書く練習を行います。このように、28NCの入門期のレッスンは、「聞くこと」から「書くこと」という流れの中で、「インプット→アウトプット」、「理解→表現」というステップを組みながら、音声と文字をつなげた活動が可能となるように構成されています。

また、Lesson 1~3の「書いてみよう」の活動はモデル文を見ながら英文を書く練習を行います。これらの段階を経て、Project 1「自己紹介しよう」で、自己表現のために英語を書くという活動につながります。

NEGIISHI MASASHI
TANABE YUJI
OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SATORU
KUROKI YUJI
IMAI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MITSUKO

Messages from Illustrators ①

本文のイラストレーター
加藤アカツキさんより

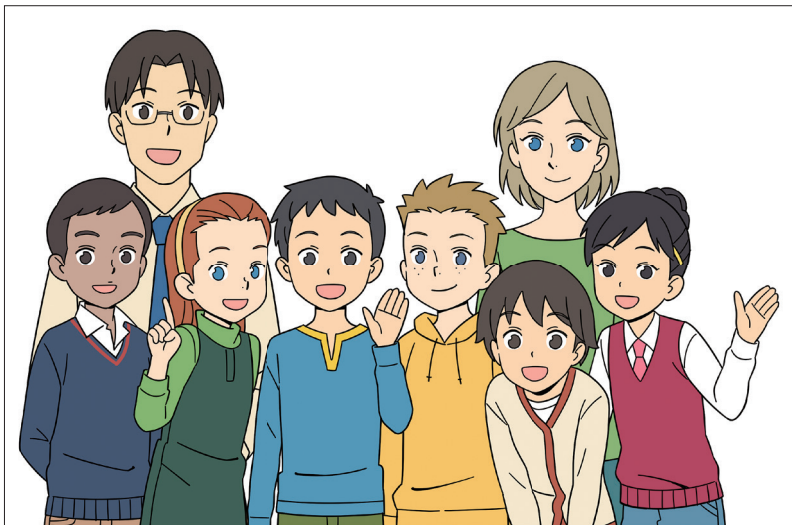
仕事場の様子



教科書に描いたイラストへの思いと生徒へのメッセージ

平成 24 年度版の *NEW CROWN* のイラストを担当したあと、ソーシャルメディアなどを通じて多くの方々からたくさんのメッセージをいただきました。メッセージをくれた方の中には、現在 *NEW CROWN* を使ってくれている現役の生徒たちだけでなく、過去に *NEW CROWN* を使っていたという大人の方もたくさんいました。

数ある科目の中でも英語の教科書のキャラクターたちは、中学校生活の間だけでなく、一生の思い出として残るものなのだとことを改めて実感しました。この *NEW CROWN* のキャラクターたちが、生徒たちの学習の助けとなってくれることはもちろんですが、卒業後も古い友人として青春の記憶の中にとどめていただくことができるよう願っています。



★こぼれ話（教科書と他の仕事との違いや苦労したことなど）

普段僕は小説の挿絵やキャラクターのデザインなどの仕事をしていますが、それらの仕事ではいかに人を惹き付けるための魅力的な画面作りをするかを第一に考えて絵を描いています。しかし、教科書などの学習書の仕事で第一に求められていることは、本文の内容を誰が見てもわかりやすいよう、正確に伝えることだと考えています。それ以外にも、教科書のお仕事には守らなければいけない様々な条件がたくさんあり、それらの制約の中で、生徒たちが3年間楽しく勉強に取り組んでもらえるように、より魅力的なキャラクターを描けるよう試行錯誤しています。

Messages from Illustrators ②

表紙のイラストレーター

笠島久嗣さんより

(イアリン ジャパン)

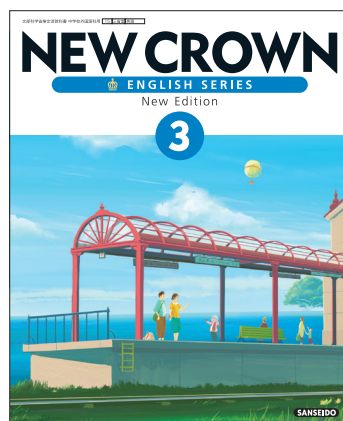
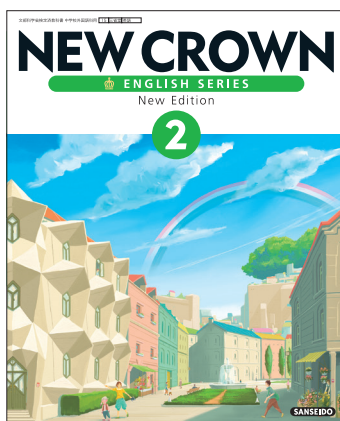


仕事場の様子

教科書に描いたイラストへの思いと生徒へのメッセージ

これから、また現在英語を勉強されている生徒たちの中で、「なぜ英語を勉強しなければいけないのか」と疑問を持つ生徒も少なくないと思います。自分もまたそう考える生徒の一人でした。そのような生徒だった私もヨーロッパに移住して仕事を経験し、現在では日本と海外を結び、毎年様々な国を訪れ、国籍様々な沢山のの人々と一緒にデザインや映像制作の仕事をしています。その仕事を通して日本だけでは出会えなかった素晴らしい人達、美しい景色、文化に触れ、これまで数え切れない程、素敵な経験をすることができ、私の人生はそれまでよりずっと豊かなものになりました。私にとってそれを可能にしてくれたのは間違いなく英語でした。その経験の中で強く感じたこと、それは科学やネットが発達し世界の殆どが明らかになったように思える現在でも、本当の世界はずっと広く豊かで謎だらけであるということでした。

「なぜ英語を勉強するのか」その疑問に対して、皆さんが英語を必要と実感できる機会はもうちょっとだけ先なのです。そしてその答えの内容は皆さん一人ひとりで大きく異なるでしょう。けれどその時が訪れたときに少しでも英語を理解していれば、必ずその先で今よりずっと広く豊かな世界が皆さんを待っていてくれるはずです。その機会を迎える前に、英語の学習を是非頑張ってください。そんな思いを表紙に込めさせていただきました。



★こぼれ話（教科書と他の仕事との違いや苦労したことなど）

映像制作ではアニメーションやCGを使って動きで表現したい内容を見せることが可能ですが、イラストレーションは1枚の静止画として表現しなければならない点です。

また中学校でずっと手にして見る表紙ですから、できるだけ飽きがこない表現になるよう意識しました。

NEW CROWNウェブサイトのご案内

<http://tb.sanseido.co.jp/english>



★充実したサポート資料

ワークシートや評価事例など、明日の授業で使える素材や多数のサポート資料をご用意しています。

★英語教育事情を知る

英語教育情報誌『TEACHING ENGLISH NOW』のバックナンバーや、「CAN-DO リスト」「英語で授業」についての冊子をPDFで公開しています。

★教科書の疑問を解決

教科書に関するQ&Aや教科書の使い方、小中接続についての方針など、NEW CROWNに関する情報が満載。

サポート資料一覧

授業計画に役立つ

- ★ 年間指導計画表
- ★ 評価規準一覧表
- ★ 移行措置資料
- ★ 評価事例集

授業ですぐ使える

- ★ 補充発問例
…GETのQ&AやUSE Readの補充問題
- ★ テスト問題例
…全LESSON対応テスト問題例
- ★ 三省堂中学校英語ワークシート
…NEW CROWN準拠の文法ワークシート

指導を助ける

- ★ 使い方ガイドブック
…NEW CROWNの使い方を紹介(指導案付)
- ★ Q&A集
…教科書に関する質問に答えます

授業実践事例集

平成24年度版NEW CROWNを使った授業事例を掲載！ 指導計画表や指導の流れを紹介しています。すぐに使える教材資料も適宜ご用意。

冊子資料をPDFで公開中

- ★ 中学校 英語で授業
ここがポイント
- ★ 中学校 英語
CAN-DO リスト
作成のヒントと実践例
- ★ USE Read
指導のヒントと実践例



平成28年度版 NEW CROWN 特別サイト OPEN!!

<http://tb.sanseido.co.jp/28/>

平成28年度版NEW CROWNの特別サイトを2015年4月よりオープンいたします。新しいNEW CROWNはどんな教科書なのか、ぜひサイトにアクセスしてご確認ください。
(平成28年度版NEW CROWNのポイント、内容解説資料などを順次公開予定)

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

- | | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 本社 | 〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 | TEL 03 (3230) 9411 (編集)・9412 (営業) |
| <input type="checkbox"/> 大阪支社 | 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地2-5-3 | TEL 06 (6341) 2177 |
| <input type="checkbox"/> 名古屋支社 | 〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル4F | TEL 052 (252) 9211・9212 |
| <input type="checkbox"/> 九州支社 | 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 | TEL 092 (531) 1531・1532 |
| <input type="checkbox"/> 札幌営業所 | 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル3F | TEL 011 (616) 8722 |